

平成30年度「海の学びミュージアムサポート」事業完了報告書

事業内容：

平成27年度から新たに開始した「海の学びミュージアムサポート」事業の4年目として、全国の博物館を対象に様々な地域、いろいろなジャンルをテーマにした博物館活動から、「海洋」に関する生涯学習の場を広げ、国民の理解増進を図る事を目的に実施した。

プログラム1「海の企画展サポート」として、全国13か所の博物館等が開催する13の海の学びに関わる企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示や付帯事業を通して「海洋」に関する国民の理解増進を図った。その他、プログラム2「海の博物館活動サポート」として9つの博物館等が行う9つの参加型プログラムを支援するとともに、プログラム3「海の学び調査・研究サポート」として9つの博物館等が行う9つの調査研究事業を支援し、海の学びを生み出す博物館活動の実施に向けた支援を行った。また、本年度より新たに「海の学び特別サポートプログラム」として、毎年指定のテーマを対象に「海の学び」を生む企画展以外の博物館活動の実践やプログラム開発等を幅広くサポートするため、3つの博物館等が行う3つの事業を支援した。(平成30年度テーマ:学校との連携活動)

さらに、平成29年度より開始した「情報・ノウハウのサポート」として、海の学びの実施に係る協力依頼のあった博物館に対して、当館および本サポート事業により蓄積した情報・ノウハウのサポートを行った。

あわせて、本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にWEBページの公開・運用を行った。あわせて令和元年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいの周知を行った。また、さらなる事業のPRとして、「サイエンスアゴラ 2018」(主催:国立研究開発法人科学技術振興機構)および「ミュージアム・メッセ 2018in トーハク」(主催:公益財団法人日本博物館協会)にブースを出展するとともに、平成30年度「海の学びミュージアムサポート」ポスター展を開催し、事業成果の紹介や事業PRを行った。

なお、第三者視点導入の観点から、プログラム1・プログラム2・海の学び特別サポートプログラムにおいて各博物館等が開催した事業への来場者・参加者を対象に、各サポート対象事業における「海の学び」の成果を把握することを目的とした『来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)』を実施すると共に、各サポート館自体が海の学び活動を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解を得られたのかの情報収集を目的とした「実施者アンケート」を実施した。

1. プログラム1「海の企画展サポート」への支援(申請:21団体21事業、支援実施:13団体13事業)

- ① 名称 : 房州と江戸・東京—海を行き交う人・モノ・文化—
主催者 : 館山市立博物館
開催時期 : 平成31年2月2日～平成31年3月17日
場所 : 釧路市立博物館
内容 : 企画展では、館山を中心とする房州と大都市江戸(東京)との関わりを、商品流通、観光、教育、文化、信仰など多様な面から紹介した。特に、それらの交流をもたら

した海上交通の重要性や、海の景観の美しさ、漁業などにスポットを当て、海に囲まれた房州の地域性を理解し、歴史から現代の身近な問題を考える契機とした。さらなる理解・興味を促すため、展示内容を詳しく解説した図録(販売)、展示概要を紹介したしおり(受付にて配布)、子ども向けの記入式ワークシート(会場配布)を作成した。

関連事業として、大学教授を講師とする講演会(1回)、担当学芸員による展示解説会(2回)、子ども向けのワークショップ(1回)を開催した。また市民ボランティアであるミュージアムサポーター「絵図士」と連携し、関連する史跡・文化財めぐりのマップ3種類を作成し、展示会場で配布した。

- ②名 称 : 知れば知るほど深くなる!? もっと知りたい! 海のこと
主 催 者 : 公益財団法人日本科学技術振興財団(科学技術館)
開催時期 : 平成31年3月21日～令和元年5月6日
場 所 : 科学技術館
内 容 : 本企画展では、日本を囲む「海」への興味と関心を高めるため、これまでの来場者が抱いた「海」に対する“素朴な疑問”や興味関心について、パネル展示、実物模型展示、体験型実験装置、ワークショップ等でわかり易く解説し、海について知り、学び、関わっていくことの意義を伝えた。また、そこから発展する海洋調査・探査に関する先進的技術や、それらを開発・保有することの重要性などを伝えた。
「海」に対する“素朴な疑問”の答えは、一般的にインターネットや書籍でも得られるが、科学技術館の特性である「見て・触って・からだ全体を使って体感し、自分の知識や興味に応じて楽しみながら科学と技術に興味・関心を深める」という特長を生かし、「海」の科学的側面、「海」を知るための技術、「海」を利用する叡智等、多方面から人と海の関係性について、学び、考える場を提供した。

- ③名 称 : 企画展「絵本でたのしむ 海と船」
主 催 者 : 公益財団法人帆船日本丸記念財団(横浜みなと博物館)
開催時期 : 平成30年10月20日～12月9日
場 所 : 横浜みなと博物館
内 容 : 明治以降日本で出版された海、船の絵本に焦点を当て、絵本の中に描かれる海、船の姿から、子どもたちと海、船の関わりについて紹介した。その時代ごとの代表的な海、船の絵本を紹介することで、子どもたちが見ていた海、船を認識し、海、船について考える機会とした。また、絵本コンテストや海事思想の普及に積極的に活動している船の絵本作家を講師に招いたワークショップを実施した。幅広い年代の参加者が、船、海の面白さを絵本の製作から学び、子どもたちにとって、絵本という身近な題材で海、船について親しめる機会とした。

- ④名 称 : 企画展「くらやみの覇者 ―駿河湾のサメにみる多様性と未来―」
主 催 者 : ふじのくに地球環境史ミュージアム

開催時期 :平成30年12月1日～平成31年3月24日

場 所 :ふじのくに地球環境史ミュージアム

内 容 :駿河湾のサメに焦点を当てた企画展を通して、海の生物に対する興味の喚起、理解の深化を促すとともに、自然との共存について考える。一般の興味や関心・話題性が高い「サメ」や、「深海」の代名詞的存在である駿河湾に関するテーマを扱うことにより、観覧意欲を刺激・誘発し、多くの来館者への「海の学び」の実現を目指した。また、関連事業として、サメに関する講演会(2回)および深海サメの解剖見学会(1回)を開催した。講演会は第一線で活躍するサメ研究者らが、解剖見学会は実際の駿河湾の漁業関係者(漁師)が、それぞれ演者となった。展示の内容を、現場当事者ならではの迫力・実感を伴いながら補完することで、より効果的な「海の学び」の実現を目指した。

⑤名 称 :いたい?おいしい?魚はわかってんの?感じる魚の大図鑑

主 催 者 :東海大学海洋科学博物館

開催時期 :平成30年7月21日～10月8日

場 所 :東海大学海洋科学博物館

内 容 :本事業では一般の方々が海の環境や生物に対する理解を深め、大切に思う心を育むと共に、それらの保護・保全について考え社会と自然の共存を牽引していける人材の育成を目的とした。上記達成のため「魚類の感覚」をテーマとする企画展を開催し、海中に存在する様々な物理的・化学的刺激とそれらを感じ取る感覚器官(視覚や聴覚などの五感や側線感覚などの特殊な感覚)について五感で体験できるハンズオン装置での学びを通じて、陸上とは異なる海洋環境の特徴やそれに適応した生物について関心と理解が深まるようにした。各付帯事業では、海洋生物との触れ合い、飼育、採集などの体験にスタッフによる解説を組み合わせ、海洋生物への親しみから、彼らが生活する海洋環境を守る環境保全の重要性を学ぶ契機となった。事業全体を通じて、海洋の自然と生命の存在および人間社会との繋がりを強く意識していただき、親しみや共存の念を抱けるような海洋教育を実践した。また、海を科学的な興味の対象として印象づけ、個々が自発的に海の学びを継続していくことを促した。

⑥名 称 :特別展『海たび 尾張・知多の海とひとびと』

主 催 者 :「海たび」展実行委員会(名古屋市博物館)

開催時期 :平成30年7月14日～9月17日

場 所 :名古屋市博物館

内 容 :愛知県の尾張・知多地方には古代から海、とくに伊勢湾との関わりを背景とする地域性が強く存在する。しかし現在では都市化と埋め立てが著しく進んだ当地方では、海との関わりはほとんど失われてしまった。本展覧会は、歴史・文化の古来の原像を追究する考古学と、主に近世以降の生活の中に文化的特色を見出す民俗学の二つの視点から、学際的に当地方の海の歴史文化を追究した。現在の沿岸地域だけでなくかつて海辺だった地域をも対象とし

て、尾張・知多地方の海を取り巻く文化を訪ね歩くようにテーマ・トピックを挙げて展示し、また講演・体験事業、実際の現地見学を併せて実施することで、当地方の地域性における「海の文化」を広く周知した。本特別展を通して、自分たちの日常とは異なる地域像を知り理解すると同時に、現地へ観光・遊び・学習等に行ってみたくなるきっかけとし、歴史文化的魅力を観光振興・地域活性化の一助として役立てることを狙いとした。

⑦名 称 :企画展「知ってる貝！ 見てみる貝！ 貝のヒミツ」

主 催 者 :三重県総合博物館

開催時期 :平成30年4月14日～6月17日

場 所 :三重県総合博物館

内 容 : 貝は、食用であると共に、貝殻は日常道具や装身具等としても利用されてきた歴史があり、海と人々が築き上げてきた文化や暮らしとのつながりについて学ぶことができる最適の素材である。

そこで、私たちの暮らしの中にある貝に焦点をあて、来館者らの海や貝への興味関心を高め、海と共にどのように生きていくかを考える機会となる展示と関連事業を実施した。

⑧名 称 :特別展「海から見た兵庫県—二つの海にはさまれて—」

主 催 者 :神戸市立須磨海浜水族園

開催時期 :平成30年7月14日～12月2日

巡回展 平成31年2月4日～3月15日

場 所 :神戸市立須磨海浜水族園、神戸市須磨区役所(巡回展)

内 容 :多様な環境を持つ兵庫の海とそこにすむ生き物と併せて、海と人との関わりも紹介し、海の重要性を理解して頂くと共に、これからのあるべき関係を来場者に考えて頂くことを目的として開催した。本事業はひょうご豊かな海発信プロジェクトの一環としても実施され、会場では「兵庫の海」、「多様な生きものたち」、「海と暮らす(水産業)」、「海と暮らす(海運業)」、「私たちの海とこれから」、の5テーマを設定した。本会場では生体、模型、パネル、映像モニター等を用いた展示を行った他、付帯事業としてサテライト会場を設け、瀬戸内海の魚に餌やり体験を常設した。

その他、付帯事業としてサイエンスカフェ、海岸の生きもの観察会、地曳網と食育イベント、瀬戸内海探検隊、さわって学ぶ瀬戸内海の生きもの達、数量限定・日本海の幸をプレゼント、を実施した。

また、連携事業として、神戸市立小学校との海の生きもの観察会、地曳網で獲れた魚の解説、一般団体・参加者との海の生きもの観察会、地曳網で獲れた魚の解説、潮干狩り体験、親子スノーケリング教室を実施した。

⑨名 称 :平成30年度秋期特別展「黒潮の海に糧をもとめて—古墳時代の海の民とその社会—」

主 催 者 :和歌山県立紀伊風土記の丘

開催時期 :平成30年9月29日～12月2日

場 所 : 和歌山県立紀伊風土記の丘
内 容 : 展示では、古墳時代の海人の活動痕跡を示す出土遺物を展示することで、海を生活の場とした海人の姿を紹介した。古墳時代における西日本最大級の海浜集落である西庄遺跡を中心とした海浜集落について遺跡ごとに展示し、淡路島との交流や、黒潮を利用した三浦半島・房総半島との交流について紹介し、紀伊の海人の暮らしを知ってもらい、海人集団の性格や集落の変化についても理解を深める機会とした。
付帯事業では、展示内容をより深く理解してもらうため、展示で紹介している各地域の遺跡について、各地域の講師の方にお話いただくとともに、海の生産用具の変遷や特徴など展示の全体像について講師の方にお話いただいた。また、古代の製塩土器づくりや塩づくりの体験をとおして、塩作りの方法や工夫を知り、塩の貴重さを理解し、海を利用することの大変さや海の恵みについて深く学んでいただく機会とした。

- ⑩名 称 : 萩博物館特別展「深海魚大行進 powered by 東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム」
主 催 者 : 萩博物館
開催時期 : 平成30年6月23日～9月2日
場 所 : 萩博物館
内 容 : 数多い生物の中で、「深海魚」ほど奇想天外でいつの時代にも老若男女を惹きつけてきた存在はいないであろう。山口県萩市は 80 年以上前からリュウグウノツカイなどの深海魚がしばしば漂着することで知られてきた全国有数の地であるため、子ども達だけでなく大人においても「自然離れ」が叫ばれる今、「深海魚」をテーマに郷土の海ひいては大自然へ人々を振り向かせ、探求意欲を喚起させることが可能な環境にある。そこで、主担当者・堀の母校である東京海洋大学が過去何十年にもわたり世界各地で収集し大学博物館(「マリンサイエンスミュージアム」)に収蔵されている約 3,000 点の深海魚標本を借用すると共に、萩博物館(およびその前身となる施設)が過去 80 年にわたって収集した地元産の深海魚標本を合わせ、ここ萩の地で深海魚に特化した日本最大級の展示会を開催した。

- ⑪名 称 : 企画展「阿波漁民ものがたり—海を渡り歩いた漁師たちの5つの話—」
主 催 者 : 徳島県立博物館
開催時期 : 平成30年4月27日～6月10日
場 所 : 徳島県立博物館
内 容 : 海は漁民らの「なりわい」と「くらし」の場であり、漁民らは海を通じて移動し、移住し、地域交流や文化伝播をもたらした。本企画展では、海に直接かかわって生きてきた漁民に焦点を当てて展示した。
徳島県沿海地域から先進的な漁法をもって移動、移住し、生計を立ててきた移住漁民の歴史と民俗について展示した。具体的には、①鳴門市堂浦の一本釣り漁民、テグス行商、②以西底曳網漁漁民(美波町・阿南市椿泊)、③器械潜水漁民(阿南市伊島)、④カツオ・マグロー一本釣り漁民(牟岐町・海陽町)、

⑤イタダキサンとよばれる海産物の行商(美波町)の5つトピックにより展示を構成した。

展示趣旨、展示内容の理解促進のため、付帯事業として「展示解説」、「こどもの日フェスティバル・ウォークラリー(クイズラリー)」、「企画展記念連続講座」、「出羽島歴史散歩」を実施した。

企画展および付帯事業を通じて、海とかかわる生活のなかで、海を通じた交流、移住をした人びとの歴史と民俗について、資料等を通じて紹介した。

- ⑫ 名 称 : 明治150年・秋山真之生誕150年記念「秋山真之と明治の艦船」
主 催 者 : 松山市総合政策部 坂の上の雲ミュージアム事務所(坂の上の雲ミュージアム)
開催時期 : ①「明治の艦船—船からみる近代日本」
平成30年7月24日～9月30日
②「秋山真之一受け継がれる海の歴史」
平成30年10月30日～12月25日
場 所 : 坂の上の雲ミュージアム
内 容 : 明治150年・秋山真之生誕150年を記念し、秋山真之と彼に関連する明治の艦船をテーマにした特別展示を前期・後期の2回にわけて実施した。
特別展示①「明治の艦船—船からみる近代日本」では、明治時代の艦船の様相や社会の変化を紹介し、海洋国家としての日本を再認識してもらう機会とした。特別展示②「秋山真之一受け継がれる海の歴史」では、村上海賊と秋山真之の接点を探り、歴史の観点から人びと海のつながりについて考え・学ぶ機会とした。
また、付帯事業として実施した秋山真之生誕150年記念シンポジウムでは、専門家による講演・パネルディスカッションを開催し、歴史の流れのなかで人びとと海の関わりを考える機会とした。

- ⑬ 名 称 : へんてこモンスター ～海から始まったその軌跡～
主 催 者 : へんてこモンスター展実行委員会
開催時期 : 平成30年7月14日～9月24日
場 所 : 北九州市立自然史・歴史博物館
内 容 : 奇妙な形態や生態をもつ多数の海生生物の現生・化石標本を展示し、それらの多様性と進化の歴史および人との関わりを紹介することにより、長い時間をかけて形成された海の生態系と人間の暮らしとの関係について考える機会とした。また、北九州市周辺で採集された標本を用いて、身近なところにも多様な海生生物やその化石が存在することを解説することによって、地域の海の豊かさを学びその海に対する関心を高める機会とした。さらに、関連事業としてタッチプールやクイズラリー、折り紙等を行うことでより効果的に海生生物について学べるようにするとともに、海洋生物に対する親しみを高められるようにした。

2. プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援(申請:9団体9事業、支援実施:9団体9事業)

- ① 名称 : 日本海版「海の学び」プログラムの提案
主催者 : 公益財団法人環日本海環境協力センター
実施時期 : 平成30年4月28～平成31年3月31日
場所 : むつ市海と森ふれあい体験館、魚津水族館、公益財団法人環日本海環境協力センター、他
内容 : 海洋生物多様性保全関係機関ネットワークが有する海洋教育のノウハウを生かし、各地で海洋教育を実施した。日本海における海洋教育の実施に関し情報交換を行うとともに、日本海における独自性や特徴に関して検討するため、ワークショップを開催した。本ネットワークが日本海の北から南までカバーする特徴を生かし、日本海における海洋教育を、日本海版「海の学び」プログラムとして取りまとめ、広く発信した。
- ② 名称 : 千葉にやって来た幻のクジラから豊かな千葉の海を知る
主催者 : 千葉県立中央博物館
実施時期 : 平成30年9月1日～平成31年2月25日
場所 : 千葉県立中央博物館、千葉県立千葉盲学校、千葉県南房総市和田町
内容 : 千葉県には砂浜や岩礁域、浅海といった多様な海洋環境があり、世界的希少種も含め様々な生物が生息していることを紹介し、地元の海に興味を持ち、守っていくことの重要性を周知することを目指した。クジラは誰もが知っている海の動物であるだけでなく、海の生態系の様々な位置を占め、様々な生物と繋がっている。そのため、クジラを通して海の豊かさを学び、海を守っていく必要性を理解してもらうことを目的とした。
月1回の連続講座を実施し、受講生自らツノシマクジラのイベント・展示を作ってもらい、海の未知なる領域の研究の紹介や博物館の教育普及活動の体験を通して海に関する研究者や教育者への道を示すための機会とした。盲学校の生徒に、クジラの実物骨格や3Dプリントした縮小模型に触ってもらうことで、海の生物であるクジラの大きさや形の不思議を知ってもらい、バリアフリーな海の学びの機会を提供した。
- ② 名称 : 輝津館「海洋教育」事業
主催者 : 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
実施時期 : 平成30年7月2日～平成31年1月31日
場所 : 坊津海岸、坊津歴史資料センター輝津館、阿多貝塚、他
内容 : 坊津歴史資料センター輝津館を中心とした「海洋教育」事業として、地域や学校と連携しながら、「海の学び・海洋教育」を実践・発展させることを目的として実施した。また、博物館主導での博学連携モデル形成に向けた「海の学び・海洋教育」の実践を目的として実施した。あわせて、坊津地域の坊津歴史資料センター輝津館・坊津学園にとどまらない、他地域の他館・他校に及ぶ「海の学び・海洋教育」の実践を目的として実施した。

- ④名 称 : 五感で味わう東京湾の恵み
主 催 者 : ふなばし三番瀬環境学習館
実施時期 : 平成30年7月14日～7月22日
場 所 : ふなばし三番瀬環境学習館、三番瀬海浜公園、三番瀬干潟
内 容 : 私たちにとって最も身近な海である三番瀬干潟での体験活動を通して、海に対する豊かな感受性や海に対する関心などを培い、海の自然に親しむみ、東京湾、およびその最奥部に位置する三番瀬干潟の有用性、周りを取り巻く自然・社会環境やそこにくらす多様な生きものについて、広く伝えることを目的に実施した。また、東京湾でくらす生きものについて、そこに構築された生態系(植物・動物プランクトン、小型の魚類から高次捕食者であるクジラ、イルカなど哺乳類に至る)各ステージの生きものの生体や標本を自らの目で詳しく観察したり、東京湾で漁獲される生きものを専門家の指導を得ながら自ら調理し食べることにより、海産物への愛好と地元船橋の漁業に対する興味関心を喚起した。
上記各体験を通じ、東京湾は首都圏を支える産業交通の要衝であると同時に、今なお多種多様な生命に満ちあふれた豊かな海域であることを正確に伝え、我々の食や生活が海によって支えられている事を知る機会とした。

- ⑤名 称 : 『豊かな海づくり』の拠点となる市民協働の博物館を目指して
主 催 者 : 貝塚市立自然遊学館
実施時期 : 平成30年7月11日～平成31年2月28日
場 所 : 貝塚市二色の浜・近木川、和泉葛城山、他
内 容 : 過去3年間実施した各活動で、昔の大阪湾は漁業が盛んであり、漁師も多く、漁獲高も高かったこと、そして、その頃の海は山から供給される植物プランクトンなど小魚の餌となる栄養が豊富であったことを漁師さんから聞いて学習した。また、漁業関係者・水産技術センターや栽培漁場、大学などが連携し、魚をふやすことの努力と研究をしていることも施設見学をして学習した。しかし、豊かな山から栄養が豊富に流れ込んでいるのかという観点から山や川に焦点を向け調査したことはなかったため、今回、海の豊かさを証明するために、海の生きもの調査と共に山・川の生きもの調査を行い、その関係をまとめることにした。
また、今後の海の学びの活動の発展を目的に、これまで3年間の海の学び活動から学んだことをまとめ、今年度の活動内容と合わせたものをテキストとして作成し、市内の図書館や公民館、幼稚園や小学校・中学校に配布した。

- ⑥名 称 : 地域の海の総合的管理に向けた「海の学び」の発信
主 催 者 : 真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)
実施時期 : 平成30年7月25日～平成31年3月17日
場 所 : 真鶴町立遠藤貝類博物館、真鶴港、岩地区集会所、他
内 容 : 「地域の海の総合的管理に向けた『海の学び』の発信」事業では、地域全体での海洋リテラシーの向上と、海を活かした地域振興を目的とし、これまで培った実績とネットワークを基盤に、「海の情報の集約と発信」「海の入口の創出」「海とともに

暮らすまちづくり」の3つを柱とした多角的かつ複合的な「海の学び」を展開した。遠藤貝類博物館がこれらの活動の拠点としての役割を果たすことで、町内外に存在感をアピールし、海の総合的なラーニングセンターとしての発展と、町による地域の海の総合的管理に向けた基礎づくりを目指した。

- ⑦名 称 : 海辺のミュージアム「ちばの海のいきもの」
主 催 者 : 千葉市科学館
実施時期 : 平成30年10月22日～令和元年6月2日
場 所 : 千葉市科学館、千葉市適応指導教室ライトポート中央(大森小学校内)、東海大学付属浦安高等学校・中部松前記念総体育館、他
内 容 : 千葉の「海の学び」をテーマに東京湾の海洋生物多様性、生態系の保全の観点に重きを置き、多角的に学ぶ絶好のフィールドとして、千葉の東京湾沿岸および外房にある海辺のミュージアム(博物館施設)と海の専門学科を備える大学施設、千葉市内の学校教育機関や自然観察に特化した専門団体、研究者とネットワーク構築しながら子どもから大人までの幅広い年代の地域住民の交流と相互コミュニケーションを図り多角的な海の環境教育事業を推進した。
①子どもを対象とした講座「モバイル顕微鏡で生きもの観察」30回開催
②大人を対象とした講座 連続講演会「東京湾の生物」シリーズ10回開催
③子どもから大人までを対象とした講座「自然観察会」5回開催
④全国科学博物館協議会研究発表会での本事業の発表

- ⑧名 称 : むつ湾シーサイドスクールプロジェクト2018
主 催 者 : 特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)
実施時期 : 平成30年8月6日～平成31年2月28日
場 所 : 外ヶ浜町観瀾山公園海水浴場、平内町茂浦、青森市青い海公園、八甲田丸船内
内 容 : 豊富な水産資源を有するむつ湾にフォーカスした海の臨海学校「むつ湾シーサイドスクール」を戦略的に実施することで、青函連絡船「八甲田丸」が、今後地域における海の学び(海洋教育)の情報発信および活動拠点になることを目指し実施した。

青森が誇る天然の良湾「むつ湾」を学ぶということは、近くて遠い存在となっている「海」と「人」との距離を近づけることになる。また、本プロジェクトを通じて市民が海への愛着を取り戻し、市民ひとりひとりが豊かな海を次世代に引き継ぐことの重要性について認識することに繋がった。

2020年八甲田丸近隣に人工的な干潟が完成予定であり、その干潟に多様な生態系を生み出すための海藻草場・磯場の造成や管理、環境美化のためのゴミ拾い、さらにその干潟を利用したまちの賑わいづくりの事業などを担う人材の育成に繋げていくことを目的に実施した。

- ⑨名 称 : 若狭おばまの海の魚と魚食文化を守り伝える
主 催 者 : グループマーメイド(御食国若狭おばま食文化館)

実施時期 :平成31年3月1日～3月31日

場 所 :御食国若狭おばま食文化館

内 容 :魚食離れがすすんでいる昨今、改めて若狭湾の多種多様な魚や調理方法、箸を使った正しい食べ方などを伝えることで、多くの人々が海に親しみ、学ぶ機会を作ることで、海を守ることの大切さを学び、毎日の中で海を意識して行動できる人を数多く育成することを目的に開催した。また、海は世界とつながっていることから、地元の住人はもとより、特に親子や外国人を対象とした学習体験を開催し、海外も含めた次世代に豊かな海を引き継ぎ、魚食文化を伝える活動3種を実施した。具体的には、若狭湾で生まれた豊富な魚や調理方法など海に関連した映像を2本作成し、映像を利用した調理体験や館内ガイドツアーなどを行った。映像は英語の字幕を入れ、翻訳機を導入するなど外国人観光客が海に親しむ機会を設けた。

3. プログラム3「海の学び調査・研究サポート」への支援(申請9団体9事業、支援実施:9団体9事業)

① 名 称 :オホーツク沿岸における低次生産相の解明

主 催 者 :北海道立オホーツク流水科学センター

実施時期 :平成30年4月1日～ 令和元年5月31日

内 容 :本調査・研究では、身近な海「オホーツク」沿岸部でもみてとれる、海洋における食物連鎖の低位層「植物プランクトン」に注目した。「植物プランクトン」を知ることによって、海洋での食物連鎖ピラミッドや海洋における自然環境について学べる機会を創出するための資料を作成した。前例のない沿岸部における低次生産に特化した調査・研究を実施することで、博物館ならではの海洋に関する科学的根拠資料となった。また、プランクトン観察プログラムを実施した。実施したことにより解説などの改良点が見つかり、このプログラムを改良することで次年度以降の観察会がより充実したものになると考えられる。

② 名 称 :地球温暖化が海洋生物の分布に及ぼす影響: 北海道西岸におけるウミウシの分布と形態・分子学的特徴に基づく分類学

主 催 者 :蘭越町(蘭越町貝の館)

実施時期 :平成30年4月16日～令和元年5月31日

内 容 :積丹半島には対馬暖流が流入しており、その勢力が弱くなったり強くなったりすることにより、生物相は時間スケールで左右されると考えられる。そこで、現在の生物相を知るため、これらの影響を受けやすい生物の一種であるウミウシ類をターゲットに、海水温上昇にともなう生物相がどのように変化するかについて評価するための定性的な調査を行った。さらに、一部の成果については、冊子を作成し、地元の教育委員会を通じて、小中学校に配布し、海洋生物への興味・関心を引く教材として活用してもらった。

③名 称 :北海道苫小牧市沿岸地域における景観の変遷に関する研究

主催者 : 苫小牧市美術博物館

実施時期 : 平成30年5月20日～平成31年3月15日

内容 : 苫小牧という地域は海との付き合い方によりその歴史を辿ってきた。まちの形態が漁村から港湾都市へと変わるにつれて育まれてきたこの土地ならではの文化的特質や都市景観における特質を抽出することが本研究の趣旨である。

歴史学的視点や芸術学的視点から資料や文献のリサーチ、踏査、それらに付随するアンケート調査などを行い、苫小牧沿岸地域の景観が海をめぐる土地の歴史の中でどのように変化してきたかについて調査した。

映像制作により、現代の苫小牧の沿岸地域の景観を映像資料として残すことで、今現在の苫小牧が抱えるこの土地ならではの文化的特質や港湾都市としての景観を後世に残し、未来の「海の学び」につなげることを目指した。

④名称 : ナマコ類に着目した亜熱帯域の内湾底質浄化に関する基礎研究および教育的展示プログラム開発に向けた準備

主催者 : 和歌山県立自然博物館

実施時期 : 平成30年6月15日～平成31年3月15日

内容 : 近年、本州周辺では乱獲や環境悪化によってナマコ類が急激に減少する一方、温暖化にともなう亜熱帯種ナマコ類の北上が各地から報告されており、ナマコ類の空白や置換による海洋生態系バランスへの影響が危惧される。

本調査研究では奄美群島の沿岸でナマコ類の生態情報を収集し、亜熱帯の内湾底質環境の維持にナマコ類がどのように関与するのか、分類学的、生態学的な基礎知識の収集を図ると同時に、海洋環境教育のための生体教材としての可能性を探るために、ナマコ類の輸送・飼育技術の開発を図った。本調査研究で得られた知識、技術に基づき、温暖化などの海洋環境問題を提起し、同時に海洋生態系バランスへの理解を高めるような特別展を開催し、ナマコを通じて海を学ぶ教育的展示プログラム開発を行った。

⑤名称 : 「三陸の海はクラゲいっぱい展」を実施するための事前調査

主催者 : 久慈地下水族科学館もぐらんぴあ

実施時期 : 平成30年8月20日～12月24日

内容 : 平成31年度に実施予定の企画展では「三陸の海はクラゲいっぱい展」をテーマに、久慈で採集されたクラゲの展示を検討している。企画展来場者にとってクラゲの展示が、生態的特徴とその多様性について理解する場となることで、現状の海洋環境を理解してもらおう機会とした。

企画展に向けて、クラゲを題材にした現状の久慈の海洋環境ならびに生態理解にむけた調査を実施し、船乗り採集調査3回、水族館現地調査1回を行った。船乗り採集調査では、クラゲの実態把握と多種類のクラゲ採集により計画的な採集、長期展示、繁殖強化を、水族館現地調査では、展示・繁殖方法等他館が実践している魅力的な展示を学びスキルアップを行い、充実したクラゲ展示を通じて来館者に地域の多様な海洋生態系を伝える機会とした。

⑥名称 : 長崎・熊本両県における自然災害(地震・噴火・津波)に関する総合調査一寛

政4年「島原大變肥後迷惑」の文献・慰霊碑を中心に—
主催者 : 国立大学法人熊本大学(熊本大学日本史研究室資料保全継承会議・安高啓明研究室)
実施時期 : 平成30年9月1日～ 令和元年6月30日
内 容 : 平成28年に発生した熊本地震を教訓に、江戸時代に熊本地方で起った震災の歴史資料や民俗資料を調査し、次世代へその実態を伝えていくこと、また、地域に埋もれた史資料の発掘に努め、資料の保全を訴えていくことを目的に実施した。なお本年度は天草地方を対象とした。
歴史学の調査手法に基づき、古文書や供養塔などの関係資料の調査、古文書や碑文の解説を通じて、当時の状況を正確に記録した。被災した人たちのリアルな息遣いや、復興のために行政がとった政策などを詳らかにしていくための調査を行った。
また、過去に起こった出来事を教訓として伝え、特に海に囲まれた九州にある県として、地震と津波による被災状況を正確に記録し、海洋教育の一環として、寛政4年の地震と津波をとらえた調査を行った。

⑦名 称 : 海路の賑わい: 西回り航路を中心とした近世・近代日本沿海航路の諸相
主催者 : 神戸大学大学院海事科学研究科(海事博物館)
実施時期 : 平成30年11月19日～ 令和元年5月31日
内 容 : 神戸市の日本遺産「北前船寄港地・船主集落」として当館所蔵資料も一部認定された。改めて所蔵する近世近代航路に関わる資料、ことに絵図・古文書類を調査し、日本沿海航路の実態把握を目的とした。
所蔵品の悉皆調査、再整理を行った。資料を精査・検討し、博物館資料として海事史上に位置付けて、成果内容を当館年報や特別展、学術講演会などを通じて今後対外的に発信していく。
近世近代に活躍した西廻り航路の資料に重点を置き、日本沿海における船舶輸送の往時の様相を学術的に明らかにした。当館の航路絵図などを再評価するとともに、かつて日本の船舶輸送を支えた和船の実態を、模型や絵馬などさまざまな資料とあわせて紹介する企画展へと展開させ、昔も今も私たちの暮らしに、船舶や海運が密接に関わっている事を示していく。

⑧名 称 : 笠沙海域における魚類の多様性
主催者 : 鹿児島大学総合研究博物館
実施時期 : 平成30年12月3日～平成31年3月31日
内 容 : 鹿児島県薩摩半島西岸に位置する笠沙周辺は、鹿児島県内でも有数の魚類多様性を誇ることが知られていたが、鹿児島大学総合研究博物館が中心となり、過去10年にわたって「商業魚種」中心の調査のみが行われてきた。笠沙周辺海域の魚類多様性の全容を解明するために、本調査研究では、もっとも種多様性が高い小型魚類のスキューバ潜水採集調査を中心に包括的な調査を行った。備船によるスクーバダイビングと釣り調査を調査期間中に2回(各3日間)実施し、定置網で漁獲された魚類の市場買い上げ調査は毎日実施した。その結果、調査期間中に895個体の魚類を得ることができた。

- ⑨名 称 : 釧路の自然と海とのつながりを学ぶ～干潟・川・汽水をテーマに～
主 催 者 : 釧路市立博物館
実施時期 : 平成31年1月1日～ 令和元年6月30日
内 容 : 北海道の中でも釧路地域には、広大な山林、日本最大の湿原、原始の姿を残す多数の蛇行河川等、様々な環境が存在することから独特かつ多様な生き物が生息する。一見、それらに生息する生き物は海と関わっていないように見えるが、特に干潟や河川、汽水湖は影響を受けており、釧路の自然全体を構成する上で、釧路の海は重要な役割を担っている。
そこで本調査では、干潟、河川、汽水湖に関して展示、調査研究を行っている博物館や研究施設を訪問し、それらと海の繋がりを学べるようなプログラムを開発した。
プログラムを開発、実施することで、一見すると海と繋がっていないように見える様々な環境や生き物も、その恩恵を受けていることを理解できるようになることを目的とする。また、観察会を通して釧路の海の多様な役割について知って頂く機会の創出を目指すための調査を行った。

4. 「海の学び特別サポートプログラム」への支援(申請:4団体4事業、支援実施:3団体3事業)

- ①名 称 : 学校で学ぶ大阪湾～学校向け貸し出し教材の開発およびその実践～
主 催 者 : きしわだ自然資料館
実施時期 : 平成30年6月1日～平成31年4月30日
場 所 : 池上曾根弥生学習館、茨木市立西小学校、大阪市立長吉小学校、他
内 容 : 大阪湾は、私たちの生活に密接に関係した海であるが、学校教育の中で同湾について学ぶ機会は限定的である。また、学校関係者の中には、今まで一度も大阪湾に出向いたことがない人もおり、教員自身が十分な関心をもっていないという現状がある。授業の中で、大阪湾に関する学習を取り入れることは、子どもたちに身近な海に興味を持ってもらい、継続的な海の学びの実現につながると思う。そのためには、まず教員が身近な海について関心をもち、正しい知識を身につける必要がある。
本事業では、学校教育現場で海の学びを恒常的に提供できる基盤を構築するために、大阪湾について学習できる貸し出し教材、プログラムの開発を行った。また、小学校での児童を対象とした環境学習のほか、学校教員向けにも研修会を行った。
- ②名 称 : 「海を体感し学ぶ」体験型アウトリーチ教材の開発・製作・運用
主 催 者 : 群馬県立自然史博物館
実施時期 : 平成30年6月5日～平成31年1月25日
場 所 : 群馬大学、富岡市立妙義中学校、玉村町立玉村南中学校、前橋市立二ノ宮小学校、群馬県立盲学校、関東甲信越地区盲学校副校長・教頭会秋季総会研修、群馬県立自然史博物館、他

内 容 : 海のない群馬県において、県下各学校の教育課程に対応した「海洋教育」の普及を目的に「海を学ぶ」教材の開発、運用、改良を行った。

平成28年度、平成29年度に本助成を受けて製作したトランクキットプロトタイプ「磯を探索しよう」「浜／干潟を体感しよう」は、多様な海洋環境とそこに暮らす生き物たちの生態系について学ぶことができる効果的な教材となった。平成30年度は、過去2年間に得た知見に基づき、地域の大学、県立盲学校と連携・協働し、大人数の教室でも「海を身近に感じる」機会を創出することをテーマに、海を学ぶ頑丈型の教材と学習プログラムを開発、運用、改良を重ね、教材パッケージを完成させた。

③名 称 : 「郷土学～様似の海を知る～」におけるプロトタイプトランクキットの新規開発と運営

主 催 者 : 様似郷土館

実施時期 : 平成30年8月20日～平成31年3月31日

場 所 : 様似小学校、北海道博物館、放課後児童施設「ひ・ま・わ・り」

内 容 : 本事業は、小中学校と連携・協働しながら、実物を用いた郷土の海に関するアウトリーチ教材のプロトタイプを製作し、それらを用いた海洋教育事業の実践方法の構築を目的としたものである。漁業を主産業とする様似町では、小学校等で地域学習の一環として漁業や海に関して学ぶ機会を設けているものの、近年では漁業権や危険性の問題などから整備された海水浴場等以外で磯に入ることが困難な状態であることや授業の時間的制約などから、“地元の海”という「郷土学」に触れる機会が減少している状況にある。本事業は、減少している地元の海について学ぶ機会、そして実際に海にいるモノに触れる機会を有意義なものとしていくための『ツール』を整備することにより、短時間であっても地元の海を感じ、理解できるようなプログラム開発を目的として実施した。

5. 「海の学びミュージアムサポート」事業専用ホームページの構築と運用

本事業の趣旨や目的、募集情報やサポート事例を広く博物館や一般に広報することを目的にWEBページの公開・運用を行った。平成30年度の各サポート採択館とプログラム内容の告知や活動報告書の公開により、今後における社会教育からの「海の学び」活動の推進を目的とした博物館が実践する海洋教育の実践事例アーカイブ化を行った。あわせて2019年度サポート事業の公募を行うことにより、本事業への申請や相談を広く受け付け、全国の博物館等に対して本事業の存在やねらいのPRを行った。

6. 情報・ノウハウのサポート(2件)

既存のプログラムに該当しないサポートとして、各博物館での海の学びの実践に必要な、資金を伴わない「情報・ノウハウのサポート」を行った。

(1) 日本郵船歴史博物館「自由研究 夏休みキッズイベント ポンポン船をつくろう」への専門家紹介サポート

内 容 : 地域のシンボル“氷川丸”をモチーフとしたポンポン船工作を通じて、海運や船舶の重要性を楽しみながら学ぶ親子向け海の学びイベント実施に係る、専門家の人材紹介サポートを行った。

(2)「大浦天主堂 キリシタン博物館」展示予定の「サン・フェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力のサポート

内 容:平成30年4月1日に開館した「大浦天主堂キリシタン博物館」での展示を目的とした「サン・フェリペ」模型製作に係るサポート依頼があったことから、船舶模型製作や船舶考証ができる専門家紹介や情報提供等のサポートを行った。

7. サポート事業の広報強化

(1)「サイエンスアゴラ2018」への出展

開 催 日 :平成30年11月10日～11月11日

開催場所:テレコムセンタービル

内 容:本サポート事業の内容および成果事例を広く一般および関係者向けに行うことを目的として、昨年に引き続き2回目の出展を行った。

本事業の具体的な成果紹介として、平成29年度プログラム2「海の博物館活動サポート」でサポートを行った群馬県立自然史博物館の成果物『「海洋教育」体感型アウトリーチ教材(トランクキット)』を展示紹介させて頂いたが、視覚障がい者にも対応したハンズオンキットであり、「触覚・嗅覚・聴覚」を使って海を体験できる展示内容であったため、主な来場者である親子連れに対して非常に有効な展示であった他、開発者である群馬県立自然史博物館のスタッフの方の展示解説により、広く一般に向けて本事業成果を効果的にPRした。

また、海洋関連団体担当者や博物館関係者に対しても、船の科学館および本事業が全国の博物館が行う海洋教育のサポートを行っているという全体像を紹介する機会となった。

(2)「ミュージアム・メッセ2018 in トーハク」への出展

開 催 日 :平成30年11月28日～29日

開催場所:東京国立博物館

内 容:本サポート事業の内容および成果紹介を博物館関係者向けに行うことを目的に、「ミュージアム・メッセ2018 in トーハク」(主催:公益財団法人日本博物館協会)へのブース出展を行った。

事業成果の例として、平成29年度プログラム2「海の博物館活動サポート」でサポートを行った群馬県立自然史博物館の成果物『「海洋教育」体感型アウトリーチ教材(トランクキット)』を展示紹介し、海の無い群馬ならではの海洋教育実施アプローチ方法等を博物館関係者を中心に紹介する機会とした。

(3)平成30年度「海の学びミュージアムサポート」ポスター展の開催

開 催 日 :平成31年2月9日～3月31日

開催場所:船の科学館

内 容:本年度プログラム1「海の企画展サポート」対象事業について、各館作成のポスター展示を会場として行うことにより、日本全国の博物館等社会教育施設での海洋教育を推進する事業について周知を行った。

また、当館を会場として実施することで、広く一般を対象に、船の科学館が全国の様々な分野・館種の社会教育施設での海洋教育推進を支援していることを広く一

般に周知する機会とした。

8. 平成30年度支援対象館への現地訪問事務手続確認(3件)

支援対象館への現地訪問により、事業成果の確認や今後の海の学びの実施に向けた情報交換を行うと共に、事務手続き関連の書類確認を行った。

(1) 熊本大学大学院人文社会科学研究所

実施日：平成30年11月6日

(2) 千葉県立関宿城博物館

実施日：平成30年12月26日

(3) 群馬県立自然史博物館

実施日：平成31年1月17日

1. 事業目標の達成状況:

【申請時の目標】

<定量的目標>

(1) 本事業を通じて、海をテーマにした生涯学習の継続、定着を目指した博物館3件の獲得を継続して目指す(①八甲田丸、②遠藤貝類博物館、③輝津館)

(2) 本事業全体の2018年度問い合わせ件数85件(対前年度+10%)

(参考)2016年度 71件、2017年度 77件

(3) 本事業の2018年度ホームページアクセス件数52,130ページビュー(対前年度目標値+10%)

(参考)2016年度 43,083PV(実測値)、2017年度 47,391PV(当初目標値)

(4) 本事業が目標とする海洋教育を各地域で推進する原動力となる人材候補(海の学びコーディネーター(仮))を延べ21名選定し、育成する(対前年度+5名)

(参考)2018年2月28日現在で16名を既に選定し、育成中

<定性的目標>

(1) 各種プログラム支援サポートを活用することで、いろいろな地域、さまざまなテーマから、博物館ならではの「海の学び」を創出しながら、今後の地域社会において海をテーマにした生涯学習の継続、定着を目指す博物館のモデル的活動、原動力となる人材の育成を目指す。

(2) 地域社会における「海の学び」の必要性、必然性を理解し、活動できる社会教育施設をサポートすることで、船の科学館が海をテーマにした博物館ネットワークの構築と様々な場面で頼られる牽引役となることを目指す。

【目標の達成状況】

<定量的目標の達成状況>

(1) 海をテーマにした生涯学習の継続、定着を目指したモデルケースとして、将来的に発展する可能性を持つ事業3件(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸、真鶴町立遠藤貝類博物館、南

さつま市坊津歴史資料センター輝津館)を継続してサポートし、地域社会を巻き込み始めた事業として推進することが出来た。(目標達成率:100%)

(2)本事業全体の2018年度問い合わせ件数

プログラム1～3に対して、合計で73件の問合せや申請相談があった。

(目標達成率:85.8%)

<内訳>

- ・プログラム1:26件
- ・プログラム2:26件
- ・プログラム3:12件
- ・特別サポートプログラム:9件

(3)博物館情報ネットワークの構築、運用

インターネットを活用し、「海の学びミュージアムサポート」専用WEBサイトにおいて、各サポートプログラム内容の告知や募集を行うと共に、決定したサポート事業の報告書等を広く公開し、今後の社会教育における海の学びの活動を推進することを目的とした海洋教育実践事例アーカイブの基盤を整備した。

■「海の学びミュージアムサポート」WEBサイト

①アクセス者数:8,037人(40,817ページビュー)(目標達成率:78.29%)

※集計期間:平成30年3月1日～令和元年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数:3.45ページ

<内訳>

- ・新規閲覧者:90.2%
- ・リピーター閲覧者:9.8%

(4)「海の学びコーディネーター(仮)」候補の育成

本サポート事業における目標の一つである「人材育成」については、これまで本サポートを活用頂いた各博物館の事業担当者を対象に、海の学びの必要性・重要性を理解し、積極的な博物館活動への展開が期待できる人材を「海の学びコーディネーター(仮)」候補として位置づけ、今後において協働できる人材の育成を目的に、人材の選定に着手するとともに対象者との今後に向けた情報交換を開始した。(目標達成率:100%)

■「海の学びコーディネーター(仮)」候補(21名)

地域	No.	氏名	所属
北海道	1	山崎 友資	蘭越町貝の館
	2	桑原 尚司(※)	北海道立オホーツク流水科学センター
	3	野本 和宏(※)	釧路市立博物館
東北	4	五十嵐 健志	むつ市海と森ふれあい体験館
	5	田村 隆文	あおもりみなとクラブ
関東	6	姉崎 智子	群馬県立自然史博物館
	7	小澤 鷹弥(※)	ふなばし三番瀬環境学習館

	8	志澤 政勝	横浜みなと博物館
	9	水井 涼太	NPO法人ディスカバーブルー
	10	嶋村 元宏(※)	神奈川県立歴史博物館
中部	11	手塚 覚夫	東海大学海洋科学博物館
近畿	12	縣 拓也	海の博物館
	13	風間 美穂	きしわだ自然資料館
	14	高橋 寛幸	貝塚市立自然遊学館
中国	15	惣路 紀通	笠岡市カブトガニ博物館
	16	堀 成夫	萩博物館
九州	17	藪本 美孝	北九州市立自然史・歴史博物館
	18	鎌田 洋昭	指宿市時遊館COCCOはしむれ
	19	橋口 亘	南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
	20	山本 正昭(※)	沖縄県立博物館・美術館
	21	片桐千亜紀(※)	沖縄県立埋蔵文化財センター

※本年度新規追加候補者

<定性的目標の達成状況>

- (1) 各種プログラム支援サポートを活用することで、いろいろな地域、さまざまなテーマから博物館ならではの「海の学び」を創出しながら、今後の地域社会において海をテーマにした生涯学習の継続、定着を目指すため、博物館のモデル的活動となる博物館を重要拠点と位置付けサポートし、今後に向けた目標の共有や密接な情報交換を行うなど、さらなる展開を目指した協議をすることができた。また、原動力となる人材の育成を目指すため、密接な情報交換を行い、その中で分野・地域毎の情報交換会開催についての前向きな問い合わせを頂くなど、人材の育成に向けた活発な活動を行った。
- (2) 船の科学館が海をテーマにした博物館ネットワークの構築と様々な場面で頼られる牽引役となることを目指すため、地域社会における「海の学び」の必要性、必然性を理解し、活動できる社会教育施設をサポートすることで、様々な地域・分野からの海洋教育実践事例が生まれ、本サポート事業ホームページ等で事例を公開し、広く知っていただく機会とした。
また、広く一般を対象に本サポート事業内容および成果紹介ブースを「サイエンスアゴラ2018」に出展するとともに、当館を会場とした『平成30年度「海の学びミュージアムサポート」ポスター展』を新たに開催し、事業PR強化を模索した。さらに、一般だけでなく博物館関係者に対しても本サポート事業内容および成果紹介ブースを「ミュージアム・メッセ2018 in トーハク」に対して新たに開催したことで、広く一般および博物館関係者に対して本サポート事業および海洋教育を推進する当館の役割を周知する機会となった。

2. 事業実施によって得られた成果:

- (1) 博物館が行う多種多様な海の学びの実践事例の創出
プログラム1～3および新たに設定した「海の学び特別サポートプログラム」によるサポートを通じて、合計34件の「各地域、各分野ならではの、博物館が行う多種多様な海の学びの実践事例(サンプルケース)」を生み出すことができた。

■プログラム1「海の企画展サポート」への支援(支援実施:13団体13事業、入場者数合計:1,004,112人)

①主催者:館山市立博物館

入場者数:6,183人

成果:これまで断片的に取り上げてきた房州と江戸(東京)との関係を、海という視点で総合的に紹介することができ、はば広い来館者の興味・関心を得ることができた。参加者からも「海を通じて歴史がつくられていることを学んだ」「海路が重要な役割を果たしていることが分かった」との声が寄せられた。また、関連事業についても、講演会・解説会・ワークショップを実施することができ、企画展だけでは理解が難しい小学生から、展示で取り上げた内容をより深く学びたい来館者まで、さまざまな層に学びの場を提供できた。とくに講演会では、専門家を講師として招くことにより、企画展だけではカバーできない点まで理解を深めることができ、参加者からも「房総の海について初めてのことを多く知ることができた」などの感想が寄せられるなど満足度が高かった。
しかしながら、入場者数が目標の72%と下回った。平成28~30年度にかけて、団体旅行の減少や観覧料改定等により年間入館者数が前年度比10~15%減少し、その影響と思われることから、さらなる広報強化に期待したい。

②主催者:公益財団法人日本科学技術振興財団(科学技術館)

入場者数:60,393人

成果:本サポート事業を活用したことによって、海に関して「そもそもどうして?」と思うようなことについて、楽しみながら理解と関心を深め、海をもっと身近に感じてもらうと同時に、今後の海との関わり方や利用方法を考えてもらえる場を提供できた。また、科学技術館のもつ「見て・触って・からだ全体を使って体感し、自分の知識や興味に応じて楽しみながら科学と技術に興味・関心を踏まえる」という特徴を生かし、体験型実験装置、実物模型、映像等を利用して海に関する素朴な疑問に対してさまざまな切り口から科学的に答えることにより、より実感を持って素朴な疑問への理解を深め、海を学べる場を提供できた。
なお、春休みと大型連休にかけて、科学技術館にとっては従来にない長期間の春特別展として開催したにも拘らず目標入場者数は99%となり、目標まで今一步及ばなかったことから、さらなる積極的な広報に期待したい。

③主催者:公益財団法人帆船日本丸記念財団(横浜みなと博物館)

入場者数:6,185人

成果:明治から現在まで、日本で出版・流通した数多くの海・船をテーマとした絵本と原画を通して、子どもたちと海と船のかかわりを紹介する企画展を開催した。絵本は、時代と社会を色濃く反映するため、その時代ごとに、子どもたちがどのような海と船を見ていたのか知る機会となった。本企画展にあわせて「海と船の絵本コンテスト」を実施し、全国から39点(47名)の応募があり、新しい魅力をもった海、船の絵本が横浜みなと博物館から誕生した。応募作品は全点企画展会場で展示し、大きな人気を呼んだ。また、付帯事業として、コンテストの他に「絵

本作家のワークショップ」(1回、20組 54名)、「海と船のおはなし会」(読み聞かせ)(8回、166名)、フロアガイド(4回、33名)を開催し、行事はいずれも盛況かつ好評であった。

なお、併設の帆船日本丸が長期休館に入ったとは言え、入館者数が伸び悩み、目標入場者数の88%となったことから、広報の不足を感じられた。また、絵本コンテスト実施やワークショップ講師の選定などに時間を取られ、資料調査に多くの時間を割かれていなかった。コンテストなど長期にわたって行う事業は、事業期間などの検討が必要と思われる。

④主催者：ふじのくに地球環境史ミュージアム

入場者数：14,272人

成果：入場者数は目標の129%となり、大きく上回る事が出来た。駿河湾のサメに焦点を当てた企画展を通して、海の生物に対する興味の喚起、理解の深化を促すとともに、自然との共存について考える場となった。一般の興味や関心・話題性が高い「サメ」や、「深海」の代名詞的存在である駿河湾に関するテーマを扱うことにより、観覧意欲を刺激・誘発し、多くの来館者への「海の学び」の実現を目指した。また、関連事業として、サメに関する講演会(2回)および深海ザメの解剖見学会(1回)を開催した。講演会は第一線で活躍するサメ研究者らが、解剖見学会は実際の駿河湾の漁業関係者(漁師)が、それぞれ演者となった。展示の内容を、現場当事者ならではの迫力・実感を伴いながら補完することで、より効果的な「海の学び」の実現を目指した。今後も、地域の海をテーマにした海の学びをさらに広げるため、教育委員会等との密な連携を継続し、地域の子供たちへのさらなる波及を期待したい。

⑤主催者：東海大学海洋科学博物館

入場者数：61,945人

成果：本企画展では「魚類の感覚」をテーマに、精巧な体の造りや複雑な生理現象そしてそれらが可能にする生存戦略について学ぶことで、海洋生物に対する驚き、興味、尊敬の念を発起させた。また、感覚を与える刺激の正体を知ることを通して、陸上とは大きく異なる海洋の物理的・化学的環境を理解できるようにし、海洋生物がすむ海という環境の特徴を知る機会となった。また、各付帯事業では生体に触れる、採集する、飼育する、観察するといった体験と専門スタッフによる解説により海洋生物への親しみを発起し、彼らが生活する海洋環境を守る環境保全の重要性を学ぶ契機となった。これらの体験を通じて得た知識や技術を元手に、今後より一層海に親しみ、利用する機会を増やすことで、楽しい時間を過ごしたり様々な発見をしたりできる素晴らしさを強く印象づけた。事業全体を通じて、来館者が海洋の生命と自然の存在を強く意識し、親しみ、理解を深める機会を提供できたとともに、海に対する科学的な興味を高め、自らの意思で海の学びを継続していくための土台作りや、海と社会の共存に向けた、人々の意識の向上および将来必要とされる人材の育成に貢献することができた。今後も、館の強みである生態展示と絡めたプログラム展開を通じて、より多くの人々が地域の海を学べる機会を創出していくことを期待したい。

⑥主催者：「海たび」展実行委員会(名古屋市博物館)

入場者数：12, 216人

成果：本特別展の内容は、多くの人に自らを取り巻く海の世界に対して開眼してもらう機会となった。企画としては地味な特別展ながら、展示資料の性質と物量は圧倒的で、来場客からは非常に好評だった。地元の地域にこんな歴史や文化があったとは、という意外な驚きや地元の歴史文化への愛着・関心を引き起こす機会となった点で成功だった。図録やパンフレットなどの印刷物に関しても、当地方の海の歴史文化を広くアピールし実際に現地を探访するツールとして役立った。また、本展では日間賀島や南知多町など現地との連携・協力関係を作り成功した。なかでも付帯事業の親子向け現地見学バスツアーは、参加者からも地元からも大変好評で、親子で海と地域や自分たちの生活との関わりについて体感し楽しみながら学ぶきっかけとして大いに貢献した。これら現地との連携関係は、海の歴史文化の魅力を広く伝える歴史文化ツーリズムなどの将来像に発展させる糸口となる。本特別展は、自分たちの日常とは異なる地域像を知り理解すると同時に、現地へ観光・遊び・学習等に行ってみたくなるきっかけとし、歴史文化的魅力を観光振興・地域活性化の一助として役立てることを狙いとしたが、その所期の目的はおおむね達成できた。

一方で、入場者数は目標の16%と下回ってしまった。これは、当初設定目標が前年度同時期に開催した大型全国巡回展を基準としたためであり、今後は適切な目標設定の必要性を感じた。また、例年になく今夏の異常な酷暑で外出警戒が連日呼びかけられていたことも大きな要因と考えられる。

⑦主催者：三重県総合博物館

入場者数：12, 823人

成果：今までにない数の博物館、研究機関、企業、団体から協力を得ることが可能となり、充実した特別展を実施することができた。来館者や参加者に対して多分野の切り口から魚類や釣りに関する魅力を伝える機会となった。また、フィールドでの活動や体験から、海を利用した活動の楽しさを十分に伝えることが可能となり、参加者の海に関する行動や考え方に、良い変化を与えるという目的を達成した。魚類や釣りに関して第一線で活躍する著名人と交流する場を設け、海洋教育、キャリア教育としての成果を得た。幼少時代に仲間たちと海に関して楽しく安全に、充実した学びの経験をすることが、いかに重要であるかを本特別展とその付帯事業の実施により来館者、参加者に認識させることに成功した。今後も海や海洋生物への理解を深める活動を継続して、積極的に実施していくきっかけとなった。

しかしながら、入場者数が目標の80%と下回った。企画展を春に開催することで、海や貝に関する関心を高めるよい機会となったが、展示観覧者数は目標値を達成することができなかった。企画展開催期間中に関連事業を多数実施したことで、入館者数は前年度を上回ったが、企画展示観覧者の増加に必ずしもつなげることができなかったことから、さらなる広報強化を期待したい。

⑧主催者：神戸市立須磨海浜水族園

入場者数：588, 260人

成果：当園の立地する兵庫県は、瀬戸内海(大阪湾・播磨灘)と日本海という二つの全く性質の異なる海に面している。本事業を通して、その二つの海の特徴、そこに暮らす生きものたちの生き様、海とともに暮らす人々、知らないところでも海の恩恵を受けている我々、について展示や関連事業を通じて、広く一般にお伝えすることができた。「海は身近にあるものだ」と改めて感じました。「海にはいろいろあるんだなとおもった。」「気軽に『海』について考えやすかった。」「社会の発展成長と自然環境を守ることのバランスの難しさを学びました。」などの感想を見ても、私たちの伝えたかったことを伝えられた。また、来場者に対してだけではなく、展示準備等を通じて、漁業者・団体や海に関わる団体、行政との連携も図ることができたとともに、それぞれの現場を訪れ、私たち自身が体験することで、展示に深みと当事者感を与えることができた。

なお、学校連携事業が目標5校5回に対して4校4回となったが、そのほかに学生を含む一般団体に対して8団体8回の実施ができたことから、ほぼ目標を達成できたと思われる。今後は学校団体とのさらなる連携強化を期待したい。

⑨主催者：和歌山県立紀伊風土記の丘

入場者数：4, 161人

成果：海浜を生活の場とした、古墳時代の海の民の活動を出土遺物から紹介することで、海に興味・関心を持ち、より身近に感じ、海を守ることの大切さに気付く機会となった。また、古墳時代の海の民や、その生業について深く学ぶ記念講演会・講座だけでなく、ワークショップを実施し、製塩土器づくりや古代の塩づくりを体験することで、製塩土器を用いた土器製塩の大変さや工夫を体感する機会となった。さらに、古墳時代の人々が海を利用した幅広い交流や生業から海の恵みを得ていたことを理解し、和歌山の海の民の活躍について知る機会となった。一方で、目標来館学校数30校に対して22校となった。これは天候の影響もあり、例年よりも学校数が少なくなったものと思われるが、より積極的な学校向けの広報を期待したい。

⑩主催者：萩博物館

入場者数：52, 207人

成果：「深海魚」を魅力的に展示を行うことで、海洋生物の多様性や生態系の複雑さを知ってもらおうと共に、人間活動が深海にも影響を与えていることも実例をもって紹介し、海の環境保全に対する認識を高める。また、萩がリュウグウノツカイなどの深海魚がしばしば漂着する全国有数の地であることを標本や剥製を通じて実感してもらおうことで、地域住民に郷土の海への関心と愛着を高めてもらう機会となった。展示だけでも深海の仕組みや生態系について学べるよう構成したが、さらにプロの研究者や館員と交流することのできるトークショーやワークショップを行うことで展示に関わる発展的情報を補いつつ、海の探究を将来の夢に

したいと願う子ども達や保護者へ自主学習や進路をアドバイスも行った。なお、上記のほか、ナイトミュージアムや列車ツアーも行うことで、歴史の町・萩において海を新たな観光要素として利活用する道を拓く第一歩となった。しかしながら、入場者数が目標の89%と下回った。これは萩市への直接的な被害はなかったものの、西日本豪雨災害(7月上旬)により1ヵ月半に亘って本展の主要集客先である山口県東部～広島県からの来場が著しく低迷したものとされる。災害等の不測の事態に備えた広報集客に期待したい。

⑪主催者：徳島県立博物館

入場者数：4,328人

成果：徳島県における海を通じた漁民の移動による交流、伝播、移住の歴史と民俗について展示で紹介し、海と生活、海と食との結び付きへの理解を深める機会とした。また、関連行事として、展示解説(3回)、ウォークラリー、連続講座(3回)、出羽島歴史散歩を実施し、各世代、参加者層に配慮し、子ども向け、家族向けイベントを交えながら、企画展に関連する「海の学び」を推進した。さらに、漁民の移動と交流の歴史・民俗について企画展で紹介することで、将来にわたる地域間交流の一助となるよう地域資源化を目指した。一方で、入場者が目標の23%と大きく下回った。これは、当初設定目標が前年度に入場無料の特別陳列を行い大きな集客があったものを基準としてしまったことが大きな要因となっているため、今後の適切な目標設定に期待したい。あわせて、本年度は団体での観覧件数が少なく、総数としての観覧者数が伸びなかったからと思われる。個人・団体を含め、さらなる広報強化に期待したい。

⑫主催者：坂の上の雲ミュージアム

入場者数：40,451人

成果：明治150年・秋山真之生誕150年を記念し、秋山真之と彼に関連する明治の艦船をテーマにした特別展示を前期・後期の2回にわけて実施した。特別展示①「明治の艦船—船からみる近代日本」では、明治時代の艦船の様相や社会の変化を紹介し、海洋国家としての日本を再認識してもらう機会となった。また、特別展示②「秋山真之—受け継がれる海の歴史」では、村上海賊と秋山真之の接点を探り、歴史の観点から人びと海のつながりについて考え・学ぶ機会となった。さらに、秋山真之生誕150年記念シンポジウムでは、専門家による講演・パネルディスカッションを開催し、歴史の流れのなかで人びとと海の関わりを考える機会となった。しかしながら、入場者数が目標の87%と下回った。これは、平成30年7月の西日本豪雨被害により、一時来場者数の落ち込みが見られるなどの影響を受けたためであり、今後は不測の事態に備えた広報強化に期待したい。

⑬主催者：北九州市立自然史・歴史博物館

入場者数：140,688人

成果：海棲無脊椎動物を中心に、奇妙な形態や生態を持つ現生・化石生物500点以上を展示し、生物の多様性と進化の歴史を実感してもらう。そして人間をはじめ、

多くの生物の活動はそうした海の豊かさに支えられて成り立っていることを学ぶ機会となった。また、タッチプールや、被り物を身に着けた写真撮影、クイズラリー、スタンプラリー、海の生物の折紙などを行うことにより、海の生物に対する理解を深めるとともに、海そのものに対する親近感や関心を高める機会となった。さらに、地元北九州で採集された奇妙な生物も展示することにより、身近なところにも多様な海の生物やその化石が存在することを知ってもらうことで、地域の海の豊かさや親しみを感じてもらう機会となった。

一方で、クイズラリー参加者が目標の67%と大きく下回った。これは、スタンプ&クイズシートの使用数を参加者数としているが、家族やグループで来場された場合、シート1枚で全員が参加されることなどが多かったからと思われる。今後は実際に則した目標設定に期待したい。

■プログラム2「海の博物館活動サポート」への支援(支援実施:9団体9事業、参加者数合計:276,438人)

①主催者:公益財団法人環日本海環境協力センター

参加者数:1,475人

成果:全体で200人の子供や市民を対象に海洋教育を実施するとして目標に対し、1,475人を対象に実施することができた。日本海側は太平洋側に比べ、市民が海と触れ合える場が限られているほか、冬季には海況が悪化するなど、海洋教育を実施する際にいろいろな制限がある。そのため、海洋教育を体験できる施設やそういったプログラムを提供する組織が、地域における海洋教育の展開・発展に大いに貢献している。特に、本事業に協力いただいた機関で取り組まれている海洋教育は様々な工夫が施されており、参加者の満足度は非常に高く、多くの子供たちや市民が海について学ぶことのできる貴重な機会となっている。このようなノウハウを活用し、更に多くの地域で提供できるようにすることで、多くの人々に海について興味を持ってもらえるようになることが期待される。また、このような観点で、本事業に参加した機関が有するノウハウを集結し、日本海版「海の学び」プログラムを提案できたことは、今後の日本海側の海洋教育の更なる発展に大きく寄与するものと考えられる。

なお、平成30年12月に海洋生物多様性保全関係機関ネットワークのウェブサイト立ち上げ、日本海版「海の学び」プログラムの公開を目指したが、海の学びプログラムの取りまとめ、ウェブサイトの構築に時間を要したため、3月22日の公開となり、1,000のアクセス数を達成できなかった。今後は、公開したウェブサイトの有効活用による、他施設への海の学びプログラム提案の継続に期待したい。

②主催者:千葉県立中央博物館

参加者数:4,495人

成果:本サポート事業により世界的希少種であるツノシマクジラの骨格のハンズ・オン

標本を製作し、関連する行事を行うことができた。興味を引きやすく、謎の多い「希少種」を対象としてイベントや連続講座を実施できたため、海への関心を高めることができた。盲学校でのクジラ講座では、多くの生徒に講座を受けてもらうために盲学校へクジラの骨格を運搬して講座を実施した。クジラの全身骨格のハンズ・オン標本としては体長5m前後のものが多い中、体長9mものクジラの全身骨格のハンズ・オン標本を製作できたことはクジラの大きさを体感する機会を与えられた。また、教室の大きさや運搬可能なサイズとしても体長9mのクジラは最大限であり、出前講座としては最大限の海の学びの場を提供できた。参加者のアンケートでは、海を守ろうと思う、もっと海を知りたくなった、という声が大半であり、海の学びとしては概ね成功したと考えられる。また、連続講座の受講生が展示やイベントを作ったため、専門的になりすぎないわかりやすい展示・イベントだったという感想ももらっており、効果的な海の学びに繋がったと考えられる。

しかしながら、盲学校での授業において、クジラのことには理解していただけただけで、少数ではあるが、クジラから海を感じることはできなかったという参加者もいたことから、今後はクジラと海が直結していることをもっとはっきりとわかりやすく伝えられるプログラムとなっていくことを期待したい。

③主催者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

参加者数：88人

成 果：参加者数は目標の149%と大きく上回ることが出来た他、海水魚の専門家や、坊津ガラガラ船・唐カラ船保存会会員らの講師を招聘し、また市内の文化財・考古関係施設と連携するなど、生物学、歴史学、考古学等の各分野から、地域の海の魚類や海岸環境、海洋生物の調査研究の歴史、海にまつわる地域の歴史と伝統文化、地域における海産物利用の歴史などについて学ぶ機会を提供できた。また、事業の連携・協力先、学校との協働により、野外学習、実際の魚類や博物館展示品の見学、ガラガラ船の製作体験、火おこし体験、土器を使用した貝の煮炊き（縄文時代の海産物調理）の体験、貝の試食体験など、参加者の記憶に残る体験型の授業を実施できた。その結果、地域の海でみられる魚類の特徴・生態、これらの魚類が棲む地域の海岸環境の特徴やその大切さを学ぶとともに、海洋生物に関する調査研究の歴史の一端にふれた。また、坊津の郷土玩具「ガラガラ船」を通して、海にまつわる地元の歴史・伝統文化について学び、さらに地域の史跡「阿多貝塚」を通して、海産物利用の歴史、海岸線の変化の歴史、海にまつわる地域の文化財について学ぶなど、多様な切り口から地域資源を活用した地域ならではの「海の学び」を実施することが出来た。さらに、地元坊津地域に所在する坊津学園に加え、新たな連携先として市内金峰地域に所在する阿多小学校の児童を対象とした活動を実施し、昨年度の金峰中学校との連携に続いて、市内他地域・他学校への海の学びの普及・拡散を目指す取り組みをさらに前進させることができた。なお、貝塚見学などのフィールドワークや、貝の煮炊きなど、屋外でのプログラムが多いことから、代替日を用意しにくい学校向けプログラムとしては、荒天対策の検討に期待したい。

④主催者：ふなばし三番瀬環境学習館

参加者数：136人

成果：私たちにとって最も身近な海である三番瀬干潟での体験活動を通して、海に対する豊かな感受性や海に対する関心などを培い、海の自然に親しむ機会となった。東京湾、およびその最奥部に位置する三番瀬干潟の有用性、周りを取り巻く自然・社会環境やそこにくらす多様な生きものについて、広く伝えた。東京湾でくらす生きものについて、そこに構築された生態系(植物・動物プランクトン、小型の魚類から高次捕食者であるクジラ、イルカなど哺乳類に至る)各ステージの生きものの生体や標本を自らの目で詳しく観察し、加えて専門家のレクチャーを実施し、参加者の多面的な理解と興味関心を喚起した。また、東京湾で漁獲される生きものを専門家の指導を得ながら自ら調理し食べ、海産物への愛好と地元船橋の漁業に対する興味関心を喚起した。以上により、東京湾は首都圏を支える産業交通の要衝であると同時に、今なお多種多様な生命に満ちあふれた豊かな海域であることを正確に伝え、我々の食や生活が海によって支えられている事を知る機会となった。

しかしながら、クジラ博士のスナメリのお話「東京湾にイルカいるか？」の目標参加者80名に対して55名となった。その要因として、開館1周年記念で行っていた講演会と参加者を食い合ってしまったことが考えられる。今後は前後のイベントとの兼ね合いを事前によく考えるなどの調整に期待したい。

⑤主催者：貝塚市立自然遊学館

参加者数：411人

成果：海が豊かになるためにはそこに流れ込む川が豊かであること、更に川でつながる山が豊かであることを確認し、豊かな海の定義を求めるために生きものが多く観察できる場所に行き、その環境や生きものを観察するとともに、講演会や現地調査を行い、豊かな海づくりの条件を見つける機会となった。また、過去3年間の海の学び活動で得た豊かな海の条件を集約するために、海の学び活動をまとめ、豊かな海づくりのためのテキストを作成することができた。

一方で、参加者数が目標の67%と大きく下回った。これは、市の広報で呼びかけたが、具体的な内容や活動場所などの説明不足によることが要因と考えられる。今後は遊学館だよりでの呼びかけの他、近隣の小学校に声をかけ参加者を募集するなどの広報強化に期待したい。

⑥主催者：真鶴町(真鶴町立遠藤貝類博物館)

参加者数：2,059人

成果：町の花に関する情報を集約し、一般の方々が目にしやすい形で発信することで、町内全体での海洋リテラシー向上と、町外には「真鶴＝海の花の町」というイメージの定着を目指した活動を行った。また、海を活かしたさまざまな体験型プログラムを実施し、多角的な「海の花の学び」を町内外に向けて展開した。さらに、海の花の学びの発信拠点として遠藤貝類博物館の存在感を町内外にアピールし、海の花の総合的なラーニングセンターとしての発展を目指した活動となった。これまでの事

業を通じて培った町内のネットワークを発展させ、海を活かした地域振興を推進し、市町村で実施可能な地域の海の総合的管理に向けた基礎づくりを行なう機会となった。

しかしながら、中写真募集に対する応募者が44名となり、目標の73%となった。このことは、ダイビングセンターでのイベント等で応募を呼びかけたが、周知が行き届かなかった。また、本事業では、写真としてのクオリティの高さよりも、海の魅力が伝わる写真を集めることが狙いだったが、その説明が十分でなかった。応募するメリットが抽象的で分かりづらかったことも反省点に挙げられる。

⑦主催者：千葉市科学館

参加者数：2,139人

成果：参加者数は目標の178%と大きく上回る事ができ、多くの人に「海の学び」を提供することができた。東京湾に面している千葉市に立地する千葉市科学館が中心となり、「ちばの海」をテーマに博物館、大学、市民団体との地域連携ネットワークを構築し、多角的な「海の学び」事業で連携・協力し一層推進することを通して「千葉の東京湾沿岸域」の地域力を高めることができた。

なお、子どもから大人までの自然観察会において、予約開始後すぐに満席になり好評を得た人気のあるイベントとして位置づけられたが、3月23日の自然観察会では、お彼岸と重なり、長引く天候不順により当初の予約枠より参加者数が少なかった。今後は前後の日程等についてもよく検討するなどの工夫に期待したい。

⑧主催者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ(青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)

参加者数：265,474人

成果：今年度は3年間行ってきた海の臨海学校「むつ湾シーサイドスクール」の集大成と位置づけ、むつ湾沿岸市町村の今後の取り組みにつながるよう、海を通じた海洋環境の勉強会(うみべん)を開催した。結果、来年度以降はむつ湾沿岸8市町村による「むつ湾広域連携協議会」が本活動を引き継ぐことになり、本協議会の目標が達成された。本活動を伝える場を青函連絡船メモリアルシップ「八甲田丸」船内に設け、海の素晴らしさを実感できる情報発信拠点の形成を目指すことができた。2020年青森駅前に干潟が完成予定であり、その干潟にさまざまな水産生物が生息するための海藻・磯場の造成や管理、環境美化のためのゴミ拾い、干潟を利用した街の賑わいづくりの活動を担う人材の育成にも繋がった。

しかしながら、「うみべん」の参加者数が目標を達成することが出来なかったことから、今後は学校団体や地域への広報強化などに期待したい。

⑨主催者：御食国若狭おばま食文化館

参加者数：161人

成果：若狭湾で育まれた豊富な魚や調理法など海に関連した映像と、子どもたちでも調理しやすい魚を使った調理体験を行うことで、海への関心を高め、魚食文化を伝える機会となった。また、英語の字幕入りの、子どもでも分かりやすい内容

の動画や翻訳機を活用することで、国内外の幅広い世代の人に、若狭湾や魚の魅力を積極的に伝えることができ、海に親しみをもち、知ってもらい機会となった。さらに、現在、世界中で取り上げられているマイクロプラスチックの問題を、地元の福井県立若狭高等学校の協力により、調査写真を映像に取り入れるなど、より身近な問題として取り上げることができた。そして、次世代に豊かな海を引き継ぐため、学習を通じて海を守ることの大切さを伝え、今後、海を意識して行動できる人材の育成に向けた活動となった。これまで増加する外国人観光客に十分に若狭湾の魅力や調理体験の手順などを伝えきれていなかったが、若狭湾の魅力を伝える英語の字幕入り映像や翻訳機の活用によって、効果的に短時間で伝えることができるようになった。今後も継続して、海の魅力伝えていき、幅広く活用できる第一歩となった。

なお、参加者数は目標参加者数を達成することは出来ているが、絶対数としては十分とは言えないため、今後はより多くの参加者に対して海の学びを提供できるようなプログラムの枠組み作りなどに期待したい。

■プログラム3「海の学び調査・研究サポート」への支援(支援実施:9団体9事業)

①主催者:北海道立オホーツク流水科学センター

成果:本調査・研究異なる地域で年間を通して採水しプランクトンサンプルを採取比較し、地域間の特性を明らかにする。これにより地域による環境や現状を知り環境保全の意識醸成に役立てることが出来た。また、ちいさな海洋生物である植物プランクトンから始まる食物連鎖や海洋環境を学べる資料となった。本調査・研究での成果を基に、身近な海で採取した植物プランクトンを科学的根拠である基本資料とすることで地域の海が持つ環境特性について、また、海流など広く海洋環境を学べる様々な博物館活動プログラムの開発に貢献する第一歩となった。

②主催者:蘭越町貝の館

成果:積丹には、名前が判明しているウミウシ類だけ73種生息していることが解った。さらにその半数は、従来北海道に生息していないとされていた暖流系種であった。このことは、科学的に興味深い結果と言える。また、ボランティアスタッフによる潜水調査では大勢で調査することにより、採集の効率を図ると共に情報共有ができ、多くのメリットがあることを見出した。ウミウシ展示において、一般に、ウミウシの印象は、紫色の色素を出す生物のイメージが強く、大きなサイズがほとんどと思い込んでいる人が多くいたが、実は5cm未満の種類がほとんどで、日本だけでも800種以上生息しており、その約1割にあたる種類が積丹で見られることについて、非常に驚かれていた。海洋生物の多様性を入り口とした、環境学習の1つの材料として、とても優れていると思われる。

③主催者：苫小牧市美術博物館

成果：苫小牧という地域は海との付き合い方によりその歴史を辿ってきた。まちの形態が漁村から港湾都市へと変わるにつれて育まれてきたこの土地ならではの文化的特質や都市景観における特質を抽出することが本研究の趣旨である。歴史的視点や芸術学的視点から資料や文献のリサーチ、踏査、それらに付随するアンケート調査などを行い、苫小牧沿岸地域の景観が海をめぐる土地の歴史の中でどのように変化してきたかについて調査を行った。映像制作により、現代の苫小牧の沿岸地域の景観を映像資料として残すことで、今現在の苫小牧が抱えるこの土地ならではの文化的特質や港湾都市としての景観を後世に残し、未来の「海の学び」につなげることが出来ることとなった。

④主催者：和歌山県立自然史博物館

成果：亜熱帯種ナマコ類に関する分類学的、生態学的な基礎知識を得たと同時に、上記内容での生体・生態展示を柱とした特別展の実現性可能性を様々な視点から評価することができた。総括として、生体採集、輸送、飼育展示といった特別展のハード面は十分に実現可能であることが判った。また、展示のデザインや解説、さらには展示外活動といったソフト面でも、以前より多くのアイデアを検討の材料と出来るようになった。例えば、効果的な学びの導入として「驚き」をテーマにするために、世界最大のナマコ類であるクレナイオオイカリナマコの生体の本州初展示を目玉にする、というような、具体的に現実的な計画が立てられるようになった。上記内容での特別展の準備の時期に大きな課題があることが判った。今回の調査研究の時期設定では、近年頻発する大型台風や豪雨の影響を受け、7月に準備することは不可能だった。これを避けるためには、特別展直前の7月に準備、生体に負担をかける期間を置かず7～8月開催、という通常の流れでは開催が危ぶまれるということが判った。今回、特別展開催より1年以上前に生体を飼育試験に供することができたため、より早い段階、例えば梅雨入り前の4～5月での準備が可能かどうか、今後の生体の健康状態などを見極めながら慎重に検討したい。

⑤主催者：久慈地下水族科学館もぐらんぴあ

成果：本調査研究による久慈湾での乗船によるクラゲの採集調査は、残念ながら成果は出せなかったが、久慈湾内での潮流の流れ方向、海上からの位置関係がある程度把握できた。また、天候や時間帯により海況が大きく変化し、海に生きる人々の生活に大きな影響を及ぼすことを実感できた。また、多種クラゲの繁殖・研究・展示に向けた取り組みに手がかりを得ることができた。今後、久慈地方に生息するクラゲの仲間を調査し実態を知ることは、久慈の海洋環境を知ることの契機になる。さらに、現在、クラゲは水族館等で人気のある生物であり、様々なクラゲを展示することを通じて久慈地方の海に興味や関心を持ってもらう準備になる。今後は、クラゲ採集調査の方法について検討しながら、採集調査を継続的に取り組み展示の土台をしっかりと構築する事が必要である。また、広く学校へのクラゲセットの貸し出し等により、久慈地域の小中学校と連携した

活動ができる基盤の構築につなげて行きたい。

⑥主催者：国立大学法人熊本大学(熊本大学日本史研究室資料保全継承会議・安高啓明研究室)

成果：前年度の島原地域での調査と比較して、以下のことが詳らかにすることをできた。島原は藩主主導で被災者・流死者を供養する行政政策が展開されたが、天草では民間有志による供養が行われている。また、島原藩は松平家という私領だったことに対して、天草は天領で預かり地として支配されていたことによる支配形態の違いが供養塔建立にも反映されていた。さらに、天草の供養塔は島原に比べて小型で、砂岩が用いられており、供養塔の分布も全て島原の対岸にあり、流死人に対する素直な追悼の意が示されている。未曾有の災害に直面した天草でも、海からの平時の恵と災害との緊張関係が潜在的に存在しており、これは現在にも通じる普遍的な概念だったことを海の学びのなかに位置付けた。供養塔のなかには、損耗が激しいものや風化が進んでいるものもあった。法量を計測し、碑文の解読にはあたり、一部は拓本等の作業に着手した。今後は拓本作業とともに3D デジタルでの保存を進めていき、後世に記録を残し海の学び活用できる教材を作成してきたい。

⑦主催者：神戸大学大学院海事科学研究科(海事博物館)

成果：当館所蔵の近世・近代の日本沿海航路に関わる資料を対象とし、現況確認のうえ、主な資料を熟覧し記載内容を精査した。和船航路関係の既存文献との比較検討から、近世—近代の実際の航海や船舶についての貴重な資料群であるのが再確認できた。近世前半の手描き航路図は、各地の地誌的情報の伝播・共有を示しており、また近世後半に出版された航路図誌は数量も多く、内海航路の普及を裏付けている。今回の調査研究を受けて、成果の一部は、2019年度自主開催の企画展「和船の活躍した時代」において展示を行う。次年度以降も随時資料紹介を行い、前近代の日本の船・海に関する歴史文化、和船に関する知識を紹介する。このように当館の海洋教育において、過去の船・海・人の重要性を示すことで、暮らしに欠かせない海運の発達と現在・未来における意義が、広く理解されると期待できる。

⑧主催者：鹿児島大学総合研究博物館

成果：本調査研究で得られた魚類全個体を同定した結果、240種であることが分かった。過去の商業種リストを加えると笠沙周辺海域には1,300種ほどの魚類が生息していることが分かった。240種のうち、鹿児島県初記録のヨウジウオ科1種、九州初記録のハタ科やイソギンポ科、ハゼ科など25種が確認された。また、日本から3個体目のオオクチケカツオ(過去の2個体は23-24年前に宮崎県と富山県で記録)が採集された。さらに、日本初記録のアジ科魚類が採集され、ヨコヅナマルコバンと命名された。これらの新知見を論文として報告した。一般向けには論文ではなく、「薩摩半島の魚類」図鑑として今秋に出版する予定である。図鑑に加え、笠沙恵比寿と鹿児島大学総合研究博物館で今夏に2回開催予定の企画展をとおして、笠沙周辺海域の海の豊さと生物多様性保全の重要性を

一般の方々にも伝えていく。

⑨主催者：釧路市立博物館

成果：干潟、川、汽水湖に関する研究機関、博物館へ赴き調査を行うことで、当館独自の3つの観察プログラムを作成することが出来た。特に海に関する観察会が当館では乏しかったことから、新しい分野の観察プログラムを作り上げたともいえる。観察プログラムは小中学校の単元でも利用できるような工夫を施したため、教員が利用することも見込んで作成できた。また、ワークシートを用意することで、参加者には意欲的に海について学べる準備もできた。観察プログラムを実施した後、実際に小中学校の授業で利用してもらえよう、釧路市内の教頭会や理科教員の研修会にて、広報活動を行っていきたい。

■「海の学び特別サポートプログラム」への支援(支援実施:3団体3事業、参加者数合計:6,055人)

①主催者：きしわだ自然資料館

参加者数：2,409人

成果：貸し出し教材は、水産試験場等の専門家や漁師による視点だけでなく、学校教員からの意見も反映させることができたため、「正確」かつ「使いやすい」内容に近づけることができた。貸し出し教材を活用するためのサポートは、今後も継続的に行う予定であり、学校教員と連携しながら水産海洋教育を恒久的に実施できる環境の実現を目指す。チリメンモンスター実習は、宝探しのような遊び感覚で、海の生き物の多様さやその生き物たちがすむ環境について学ぶことができるため、学校での海の学びの導入に適している。また、教室や自宅など場所を問わず実施できるので、海のない地域でも取り組むことが可能である。本実習と上記の貸し出し教材を組み合わせることで、学校にいながらにして、様々な側面から海の学びを提供することが可能となる。学校教員を対象とした環境学習では、教員自身に大阪湾を知ってもらうだけでなく、実際に授業の中での活用法や海洋教育プログラムの提案も同時に行った。教員自らが海の生き物に関して興味をもち、活用方法について知ってもらうことで、学校内での水産海洋教育の実施を促し、より多くの子どもたちに大阪湾について知ってもらう機会の拡充につながったと思われる。出前授業や休日を利用した環境学習を実施したことにより、海の生き物に興味をもっている児童だけでなく、今まで関心の薄かった児童に対しても海の学びを提供することができ、魅力や重要性を伝えることができた。

②主催者：群馬県立自然史博物館

参加者数：3,470人

成果：大人数の教室で授業展開できるよう頑丈型教材を開発したことで、「海にいったことがない」小学生、中学生に海洋学習の場を提供することができた。また、海の音をきいて、海の生き物に触れて、海のおいを感じて、海の環境と海に暮らす生き物たちの生態系について、「磯」「浜／干潟」のトランクキットを通して学ぶ

場を創出し、海についてもっと学びたいと感じていただくことができた。併せて、海は川を介して山とつながっていることを学ぶ模型を活用することで、海がない県であっても、山と海はつながっており、日々の持続可能な暮らしが環境の保全につながることを体感することに寄与することができた。さらに、群馬県立盲学校と連携・協働しながら教材を開発することで、「だれもが」「たのしく」初に親しむことのできる頑丈型教材を開発することができたほか、地域の美術系、教育系の大学と連携することで、大人数教室で授業を行う学校教員むけの普及啓発パンフレットと活用可能な多様な学びのプログラムを開発、提供することができるようになった。なお、海のない県の自然史系博物館として、学校教育現場を対象に「海洋教育」を実践し、学校現場で利用可能な教材と多様な学びのプログラム開発、運用、改良、完成させることができたことは、今後、より多くの生徒に海に触れる機会を提供することを可能としたことは、大きな収穫であった。

③主催者：様似郷土館

参加者数：176人

成果：様似町の海に関して学ぶことができるように学校と連携・協働しながら、プロトタイプトランクキットの製作とそれらを活用した教育プログラムの構築を目的として実施した。様似町の海について学ぶことができるようツールとして、海の生き物、地元産業、考古学、ジオパークなど、郷土の海の学習に関連した4つのテーマのトランクキットを作成した。また、地元の小学校、中学校と連携・協働して、このキットを活用したプログラムを構築し、実際に運営したなかで判明した改善点を洗い出し、改良をおこなった。これにより、今後は当館での活用にとどまらず、近隣の学校・他施設においても本トランクキットを活用した、地域の海の継続的な学習機会創出のための第一歩となった。

(2)プログラム3の成果を基にした「海の学び」の実践

前年の平成29年度プログラム3「海の学び調査・研究サポート」の成果を基に、本年度博物館活動として実際にプログラム1「海の企画展サポート」として実践された事例が1件生まれた。(名古屋市博物館)

(3)本事業の目標の一つとして設定した「今後の地域社会において海をテーマにした生涯学習の継続、定着」を目指す博物館3館(真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)を重要拠点として位置付け、特に注力したサポートを継続して行った。

中でも「青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸」については、八甲田丸が当サポート事業により実施していた事業「うみべん」の活動が青森市に有効性を認められ、令和元年度より青森市の事業となり定着・継続が見込まれることから、本サポート事業から派生する特異なモデルケースの一例となった。

(4)『来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)』の実施

各サポート対象事業における「海の学び」成果の把握や、今後において全国の博物館等が実施する「海洋教育の推進」活動をより効果的にサポートするための体制構築に向けた

事業内容検討用の基礎資料を得ることを目的として、プログラム1・プログラム2および海の学び特別サポートプログラムにおいて各博物館等が開催したサポート対象事業への来場者・参加者を対象とした、「来場者・参加者の「海の学び」調査(アンケート)」を実施した。

第三者評価の視点から、客観的な「海の学び」の効果測定を行うことを目的に実施し、今後の各サポート対象事業における「海の学び」の成果と傾向を把握するための基礎資料として位置づけることが出来た。

【「海の学びミュージアムサポート」事業として】

・設問「海について学びましたか？」P1・P2・特別プログラム合算の集計では、「とても思う」と「そう思う」の合計が88.8%を占め、社会教育現場(博物館等)から「海洋」に関する生涯学習の場を広げる当事業の目的として一定の成果が認められた。

- ①プログラム1「海の企画展サポート」サンプル数:7,028(13事業)
- ②プログラム2「海の博物館活動サポート」サンプル数:1,271(9事業)
- ③「海の学び特別サポートプログラム」サンプル数:1,136(3事業)
- 合計:9,435(25事業)

(5)実施者に対する「海の学び」調査(アンケート)の実施

各プログラムのサポート館が本サポート事業を通じてどの程度「海の学び」の必要性や理解が得られたのかの情報収集を目的として、各プログラムの実施者・実施館を対象としたアンケート調査を実施した。

【「海の学び」の理解度・必要性について】

・設問「海の学びを理解できたか」の集計では、「大いに理解できた」と「ある程度理解できた」の合計が100%となった。また、設問「海の学びの必要を感じられたか」の集計では、「大いに感じられた」と「ある程度感じられた」の合計が100%となり、海洋教育に特化した本事業のサポートを受けることにより、社会教育現場(博物館等)において海洋教育の理解や必要性が感じられたとの回答が得られた。

- ①プログラム1「海の企画展サポート」サンプル数:13(13事業)
- ②プログラム2「海の博物館活動サポート」サンプル数:9(9事業)
- ③プログラム3「海の学び調査・研究サポート」サンプル数:9(9事業)
- ④「海の学び特別サポートプログラム」サンプル数:3(3事業)
- 合計:34(34事業)

(6)情報・ノウハウのサポート(2件)

- ①日本郵船歴史博物館「自由研究 夏休みキッズイベント ポンポン船をつくろう」への専門家紹介サポート

成 果:地域のシンボル“氷川丸”をモチーフとしたポンポン船の工作をテーマにした、海運や船舶の重要性を楽しみながら学べる親子向け海洋教育プログラムの実施に係る専門家の紹介を行った。昨年度に続いてのサポートであり、館独自の海洋教育プログラムとして継続実施されていることから、本情報・ノウハウサポートをきっか

けとした今後の継続した海洋教育の実施が期待できる。

②「大浦天主堂 キリシタン博物館」展示予定の「サンフェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力のサポート

成 果:「大浦天主堂キリシタン博物館」での展示を目的とした「サン・フェリペ」模型製作に係る船舶模型製作や船舶考証ができる専門家紹介や情報提供等のサポートを行った結果、平成31年4月22日に完成した模型を無事大浦天主堂キリシタン博物館に納品し常設展示場にて公開することができ、今後における海洋教育につながるサポートを行うことができた。

海との関わり合いが少ない博物館において、海洋や船舶についての情報・ノウハウが必要となった場合の協力先として、船の科学館「海の学びミュージアムサポート」が活用された一例となった。

(7) サポート事業の広報強化

①「サイエンスアゴラ2018」(主催:国立研究開発法人科学技術振興機構)への出展

参加者数:約642名

成 果:事業成果物の一例として群馬県立自然史博物館が制作した『「海洋教育」体験型アウトリーチ教材(トランクキット)』(平成29年度プログラム2「海の博物館活動サポート」事業成果物)を展示紹介し、開発者である群馬県立自然史博物館スタッフと共に展示解説を行う事で、親子を中心とした幅広い年齢層の方たちに「海」を体験し、親しみを持って頂く機会とした。あわせて本サポート事業の紹介も行う事で、船の科学館を中心とした社会教育における海洋教育推進体制の構築を目的とした本事業のPRを一般向けに行う機会となった。

②「ミュージアム・メッセ2018 in トーハク」(主催:公益財団法人日本博物館協会)への出展

参加者数:121名

成 果:船の科学館が実施する本サポート事業について、一般をはじめ、特に博物館関係者に周知することを目的に事業および事業成果の紹介を行った。事業成果の紹介として、平成29年度プログラム2「海の博物館活動サポート」でサポートを行った群馬県立自然史博物館の協力により『「海洋教育」体験型アウトリーチ教材(トランクキット)』の展示紹介を行ったほか、支援対象事業担当者による展示解説を行った。同時開催の「第66回全国博物館大会」において実施された「展示会プレゼンテーション」でのプレゼンも行い、当館が本サポート事業を通じて全国の博物館が行う海洋教育のサポートを行っているという全体像を広く紹介する機会となったとともに、ブースに来場された博物館関係者に向けて本サポート事業の趣旨や、当館が考える「社会教育施設からの海洋教育推進」について伝えることで、来場者ならではの今後の「海洋教育」に結びつくサポート案などを相談する機会となった。

③平成30年度「海の学びミュージアムサポート」ポスター展

参加者数:8,783名

成 果:プログラム1「海の企画展サポート」の平成30年度対象事業について、各館作成のポスター展示を行うことにより、日本全国の博物館等社会教育施設での海洋教育を推進する事業について周知を行った。

当館来館者に向けて行うことで、船の科学館が全国の様々な分野・館種の社会教育施設での海洋教育推進を支援していることを広く一般に周知できたことから、本サポート事業のさらなる広がりにおいて有効な手法の一つとなった。

(8)平成30年度支援対象館への現地訪問事務手続確認(3件)

成 果 :平成30年度支援対象館を訪問し、今後の継続・発展した海の学びの事業実践に向けて必要と思われる事項等についての情報交換を行うとともに、改めて事務手続きの確認を現地にて行った。

今後も支援対象館への現地調査を積極的に行い、実施館との情報交換を基に本サポート事業の改善に繋げていきたい。

3. 成功したこととその要因

【成功したこと】

(1)各種サポートプログラムを活用して、様々な地域・分野から海の学びの実践をサポートすることが出来、各地の博物館を中心として地域社会に対しての波及効果を与える事が出来た。

(2)本事業の目標の一つとして設定した「今後の地域社会において海をテーマにした生涯学習の継続、定着」を目指す博物館3館(真鶴町立遠藤貝類博物館、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸)を重要拠点として位置付け、特に注力したサポートを継続し、さらなる展開や目標の実現に向けて、地域社会を巻き込んだ事業として推進することが出来た。

中でも「青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸」については、八甲田丸が当サポート事業により実施していた事業「うみべん」の活動が青森市に有効性を認められ、令和元年度より青森市の事業として定着・継続されることとなったことから、当サポートを通じた地域の社会教育における「海の学び」が定着しはじめる手応えを感じる機会となった。

(3)情報・ノウハウのサポート(2件)

「日本郵船歴史博物館」への専門家人材紹介については、昨年度の情報・ノウハウのサポートも活用頂き好評であったことから本年度も2回目の申請となり、日本郵船歴史博物館ならではの事業として、さらなる海洋教育実践に向けて必要な専門家紹介サポートを行ったことから、今後の継続した海洋教育実践が見込まれる。

また、「大浦天主堂キリシタン博物館」展示予定の模型製作に係る専門家等紹介のサポートにおいても昨年度から引き続き実施し、紹介した専門家による指導や模型完成後の運搬方法などのサポートを行ったことから、今後の海洋教育実践に際して必要なサポートを行うことが出来た。

なお、昨年度の情報・ノウハウのサポートとして青森県“陸奥湾”をフィールドに活動する地域の各博物館同士の情報交換会の開催を行ったが、昨年度の情報交換会開催をきっかけに、本年度も継続した情報交換が継続されるとともに、各館の連携による活動が始まっていることから、当サポート事業における資金以外のサポートを通じた各館海洋教育事業の連携や発展に対する有効性を再確認することが出来た。

(4)「海の学びコーディネーター(仮)」候補の育成

本年度から初めて着手した人材育成事業であるが、これまで本サポート事業を活用頂いた担当者のうち、21名を「海の学びコーディネーター(仮)」候補者として選定し、今後の人材育

成に向けた条件等に関する情報交換に着手する事が出来た。

(5) サポート事業の広報強化

本サポート事業の内容や成果のPRについて、一般市民向けのPRを目的として「サイエンスアゴラ2018」への事業および成果紹介ブース出展を行うとともに、博物館関係者向けPRを目的として「ミュージアム・メッセ in トーハク」へのブースの出展を行った。一般はもちろん博物館関係者に対して広く本サポート事業の内容や成果の紹介を行うとともに、来場された博物館関係者との海洋教育実施に関する相談の場ともなったことから、本サポート事業の内容や成果、および当館が社会教育施設における海洋教育推進を行っていることを広く周知することができた。

また、本年度新たに『平成30年度「海の学びミュージアムサポート」ポスター展』を開催し、船の科学館に来館される一般市民や博物館関係者に対しても本年度支援対象事業の成果物の紹介を通じて海の学びの成果や当館を中心とした実施体制をPRする事ができ、広く一般および博物館関係者に向けた事業紹介の機会となった。

【成功の要因】

- (1) 各館からの助成申請本申請の前に必ず「事前相談期間」を設け、先方担当者と海の学びの実施に関する綿密な情報交換やサポートを行っている事から、事業の実施体制や実施内容における広がりや深まりが生まれたものと思われる。
- (2) 該当する3館の事業については本サポート事務局において「重要拠点」として位置づけ、通常の支援対象館よりもより密接な情報交換を定期的に行い状況確認をすると共に、現地訪問による今後の方向性の確認を行っている点が奏功しているものと思われる。
中でも「青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸」が拠点となって実施していた海洋教育事業が当初目標として掲げていた事業の継続・自立の点において達成できたことは、八甲田丸を中核に自治体との情報交換や連携が活発であったことから、「海の学び」の重要性・必要性が地域に浸透し始め、認められる結果となったと思われる。
- (3) 情報・ノウハウのサポートの成功要因
日本郵船歴史博物館への専門家人材紹介サポートについては、前年度の情報・ノウハウサポートでの支援により実施されたプログラムにおいて、「海の学び」の有効性を感じて頂き、継続を検討頂けたことから、当サポート事務局としても情報交換を継続し、事業の継続に向けて改善点の洗い出しや必要なサポートの確認を行ったことから、本年度のサポートに繋がり、今後のさらなる海洋教育実施に向けた機会となった。
『「大浦天主堂 キリシタン博物館」展示予定の「サンフェリペ」模型製作に係る専門家等紹介協力』についても、昨年度の専門家紹介だけで終わらずに、情報交換や進捗状況の確認、運搬等の相談対応を継続して行ったことから、今後の海洋教育実践に向けたサポートとなった。
- (4) 「海の学びコーディネーター(仮)」候補の育成の成功要因
これまでサポートを行ってきた各館担当者との継続した情報交換により、各担当者の海の学びの理解度や行動力等について知る事ができ、今後の人材育成に向けた候補者の選定や人材育成方法に関する情報収集を行うことが出来た。
- (5) サポート事業の広報強化の成功要因
本サポート事業内容の一般に向けたPRとして、単なる本サポート事業内容の紹介にとどまらず、具体的な海の学びの成果物として、今年度支援対象館である群馬県立自然史博物館と

協働して、具体的な海の学びの成果物の体験を通じて紹介することが出来た。あわせて、新たにポスター展を当館を会場に開催し、本サポート事業内容だけでなく、当館の役割についても船の科学館に来館される一般および博物館関係者に向けて紹介する機会としたことから、有効な事業PR機会の創出が出来たものと思われる。

4. 失敗したこととその要因

【失敗したこと】

- ①当初目標の一つとして掲げていた「ホームページアクセス件数52,130ページビュー」に対して、「40,817ページビュー(目標達成率:78.29%)」となり、目標を達成できなかった。
- ②当初目標の一つとして掲げていた「問い合わせ件数85件」に対して、「73件(目標達成率:85.8%)」となり、目標を達成できなかった。

【失敗の要因】

- ①ホームページアクセス件数については、現状のWEBサイトにおいて文字情報量が多くなっていることから見難い状況となっていることが考えられる。今後は写真を多くするなど、より見易いページへと改修する必要があると思われる。
- ②問い合わせ件数については、本サポート事業も4年目を迎え、博物館業界に対する周知が一段落し、問い合わせが落ち着いてきたのではないかと考えられる。今後は現地訪問を継続して行うとともに、特に新規館や、海無し県の博物館、内陸部の博物館への訪問を強化するとともに、あらゆる地域・分野から海洋教育は実践できることを周知していく必要があると思われる。